

# 明治期三井物産における中国語スペシャリスト

木 山 実

## I はじめに

戦前期日本の経済界に君臨した三井物産は、明治9（1876）年に開業したその翌年、早々に最初の海外支店を清国・上海に設置した。上海支店はその後、華北地域での業務展開の拠点となり、以後一貫して三井物産の主要支店であり続ける。三井物産は上海支店に続いて、フランスのパリ、アメリカのニューヨーク、イギリスのロンドン等、欧米の主要都市にも次々と出店するが、明治期には天津、北京、広東、大連など清国内に出張店・出張員を次々と置いたのであり、国別で見ると清国への展開が他の国を圧倒していた<sup>1)</sup>。イギリスの植民地であった香港にも支店が置かれ、同店は華南方面の拠点として重要な役割を果たしていく。このような店舗網の広がりをもても、清国での業務展開は、三井物産の収益の大きな柱であったといってよい。日清戦争後の明治30（1897）年から37年にかけての三井物産海外支店の輸出入取扱高の中でも、在清国支店が約6割を占めた<sup>2)</sup>。

三井物産は草創期こそ外国人に代理店を任せて海外の事業を進めていたこともあったが、明治12、13年頃以降は、基本的にはなるべく日本人の社員を駐在員として派遣して海外店舗の支配人（支店長）とする方針を貫いた<sup>3)</sup>。

1) 『三井物産小史』（三井物産による再刊、昭和40年）p 123 以降の年表参照。

2) 山藤竜太郎「三井物産の買弁制度廃止－上海支店に注目して－」（『経営史学』第44巻第2号、平成21年）p 6。

現地人は店限として雇用することはあっても、支店長の地位には就かせず、日本人駐在員を海外支店トップに据えたのであった。

ところで、商社が海外で事業展開する場合、そこでは必ず言語面での障壁がクリアされる必要がある。まして三井物産が上記のような、日本人駐在員を海外支店トップに置くという方針を堅持していたのならば、なおさらである。

このような取引上の言語面での障壁のクリアや、あるいは西洋式簿記法の普及などをも意図して、近代的な商業教育の必要性が、明治期のかなり早い段階から福沢諭吉や渋沢栄一らによって叫ばれていた。この両者が関係する慶応義塾や商法講習所は、実業界に多数の人材を輩出していくことになるが、三井物産もそれらの人材を採用して、海外支店の貴重な人員として派遣していたのであった。

三井物産が学卒社員として特に多く採用した一橋系諸学校は明治8（1875）年開設の商法講習所を源流とするが、同所はその後、東京商業学校、高等商業学校と改組されていく。だがそこで講じられた外国語は英語、フランス語、ドイツ語などの西洋語が中心で、中国語<sup>4)</sup>が第2外国語に加えられたのは、高等商業学校に改組された2年後の明治22（1889）年からであった<sup>5)</sup>。

三井物産は上述の通り、明治10年に上海支店を設置し、その後も清国内で着実に店舗網を拡大していた。このような業務拡大のなか、まだ一橋系諸学校での中国語教育が緒に就いていない時期、三井物産は在清国支店での中国語熟達者をどのように確保していたのであろうか。

明治期の三井物産による清国での営業活動に必要とされる人材育成については、しばしば同社が明治30年代に構築していった社内での人材養成制度、

3) 木山実『近代日本と三井物産』（ミネルヴァ書房、平成21年）pp 98-99、pp 246-255。

4) 現代の「中国語」に相当するものは、当時の日本では支那語とか漢語、清国語、清語などと表されたが、本稿では煩瑣を避けるために「中国語」と表記する。また国号についても、「清国」と表記する。一般に中国の言語は満州語、広東語、北京語など多様な言語で構成されたが、本稿ではその種のことに立ち入っての議論はしていないことをあらかじめ断っておく。

5) 六角恒廣『中国語教育史の研究』（東方書店、昭和63年）p 159。

すなわち「清国商業実習生」、「支那修業生」、「海外貿易実習生」の制度などが引き合いに出される<sup>6)</sup>。だが、この制度が始動するまでの間でも、三井物産は明治10年開設の上海支店を皮切りに、その後いくつかの店舗を清国内で展開させていたのだから、それらの店で営業活動ができる人材を確保する必要性に迫られていたであろう。

もっとも、高等商業学校で明治22年に中国語が講じられるよりも前に、東京外国語学校や興亜会支那語学校などの学校で中国語がすでに講じられていた<sup>7)</sup>。また、漢字文化圏に属する日本人にとっては、まず手始めに筆談という形で清国人とコミュニケーションをとることも可能であったろう。三井物産に採用される以前に中国語を勉強していなくとも、とりあえあず清国内に赴任し、オン・ザ・ジョブ・トレーニング (OJT) で徐々に清国人との商売に熟達していくという道筋もありえたであろう。この辺の事情も念頭に置きながら、以下では明治期三井物産がどのようにして中国語スペシャリストを確保していたのかという問題を明らかにしていきたい。

## II 3人の「支那通」－明治21年頃の上海支店の状況－

三井物産の最初の海外支店である上海支店が設置されて10年余がたった明治21年頃の同支店の状況に関して、当時、同店に勤務していた遠藤裕太なる人物による以下のような回顧録がある。

当時の支店長が上田安三郎氏、欧州通の益田英作、高商出の福井菊三郎、藤瀬政次郎の諸君が先輩で、支那通は呉永寿、島田糸太郎、石本鎖太郎等であつた。ハイカラとバンカラの混合で仲々賑やかなことだつた<sup>8)</sup>。

当時の上海支店は、アメリカへの留学経験をもつ上田安三郎支店長のもと、社長益田孝の実弟でヨーロッパ留学歴をもつ益田英作、また欧米への留学経

6) 前掲、山藤竜太郎論文のほか若林幸男『三井物産人事政策史1876～1931年』（ミネルヴァ書房、平成19年）第4章などを参照。

7) この件については、前掲、六角恒廣『中国語教育史の研究』を参照。

8) 遠藤裕太「横浜時代から上海時代への回顧」（原安三郎編『山本条太郎翁追憶録』（三秀社、昭和11年）p 496 以下参照。

験はないが、現在の一橋大学につながる高等商業学校（高商）出身の福井菊三郎、藤瀬政次郎<sup>9)</sup>が当時はまだ稀少な学校出、また高商で英語などの語学も勉強した人材ということで「欧州通」として認識されているのに対し、呉永寿、島田粂太郎、石本鎖太郎なる人物たちは「支那通」と位置づけられている。この回顧録はかなり後の昭和11（1936）年に刊行された書物に収録されているもので、福井菊三郎は上海支店勤務後シンガポールや香港、さらにニューヨークで勤務したこと、また藤瀬は上海の後はロンドンに勤務したことから、兩人とも英語の達人と認識されていたことが反映されて上のような回顧にあらわれたものと思われる。

一方、「支那通」と認識されている呉永寿、島田粂太郎、石本鎖太郎は、いずれも明治20年1月時点では、まだ三井物産の人名録に名がない<sup>10)</sup>から、彼らはいずれも明治20年の後半以降に雇用されたものと思われる。そして彼らは後述するように、その後、明治27年勃発の日清戦争に際しては、いずれも日本陸軍から戦地での通訳官に任命されるほどであったことから、彼らは中国語に熟達した人物であったとみられ、そのような事情が「支那通」との認識を得ていったものと思われる。

これら3名の「支那通」のうち、最後の石本鎖太郎<sup>11)</sup>は、元治元（1864）年、高知に生まれた人物で、地元・高知の海南私学校に学んだのち、高知出身の大物政治家佐々木高行の支援で明治15年に上海に渡り、そこでフランス人が経営する学校に入り、英語、中国語を研修し、更に北京に赴いて語学研鑽に努めたという。清国での滞在は6年に及び、かなりの中国語能力を身につけたようで、いったん帰国ののち明治21年には三井物産に採用され上海支店で勤務<sup>12)</sup>していたが、一年程度で退職した。その後、日清戦争時には第一

9) 福井菊三郎、藤瀬政次郎については、由井常彦「明治期三井物産の経営者（下ノ二）」（『三井文庫論叢』第45号、平成23年）に詳しい。

10) 「三越店員・物産会社員・東京相統講員人名控」（三井文庫所蔵史料、別69）。

11) 石本鎖太郎については断りのない限り、東亜同文会編『対支回顧録』下巻（原書房から昭和43年に復刻版。原本は昭和11年刊）p 284、に拠る。

12) 田中康雄「史料紹介・三井物産会社上海支店『内状』」（『三井文庫論叢』第7号、昭和48年）p 284の史料〔90〕では、石本鎖太郎の上海入店は明治20年9月とのことで

師団長山地元治將軍の司令部附通訳になったという。

石本が三井物産で勤務した頃、彼の中国語はかなりのレベルに達していたのであろうが、三井物産での勤務は一年程度であり、上海支店への貢献度はそれほど高くないように思われる<sup>13)</sup>。では、石本以外の2名についてはどうであろうか。

呉永寿<sup>14)</sup>は、長崎で江戸時代から中国語の翻訳や通訳に代々世襲で従事する専門家、唐通事の家の出身である。彼は数ある唐通事のなかでも、幕末期に台頭した呉泰蔵の実弟呉来安の子である。呉永寿は文久3（1863）年に生まれた。明治12年、呉永寿が17歳の時、彼は伯父にあたる鄭永寧を頼って上京し、興亜会支那語学校に入った。鄭永寧は当時、外務権大書記官という官吏の身分にあり、呉永寿も翌13年から外務省留学生として北京に渡ることになった。その後、呉永寿は上海領事館に勤務し、明治20年9月に辞官して三井物産上海支店に勤務することになった<sup>15)</sup>。

三井物産入りした呉永寿は、その後、北京、天津、芝罘の支店・出張店を転々とし、また天津出張店店長、本店調査課、營口出張店主任、大連出張店主任という各店舗の主任クラスも歴任したというから、彼の三井物産に対する貢献度は、石本鑽太郎と比べても相当に高かったといってよいであろう。

3名の「支那通」の残り、島田桑太郎についてはどうであろうか。さきほど触れた長崎の唐通事のなかでも幕末に台頭した呉泰蔵には、呉来安の上に弟が4人おり、その中に彌三次なる者がいた。泰蔵が長男で、彌三次は三男である。彌三次は長崎の島田治八の養子となるが、島田桑太郎は、この呉彌

---

ある。

- 13) 三井物産業務日誌である「日記」（三井文庫所蔵史料、物産14）によると、石本鑽太郎は明治21年11月8日付で解雇となっている。同年10月半ばから病氣と称して4週間の予定で日本に帰省したものの、期限を過ぎてても出社せず、この解雇に及んだようである。「日記」明治21年10月17日、同年11月8日の記述参照。
- 14) 呉永寿については断りのない限り、東亜同文会編『統対支回顧録』下巻列伝（原書房から昭和48年に復刻版。原本は昭和16年刊）pp 223-224 に拠る。
- 15) 前掲「史料紹介・三井物産会社上海支店『内状』」p 284 の史料〔90〕では、呉永寿の上海入店は明治20年8月となっている。

三次改め島田彌三次となった、その子とみられる人物である<sup>16)</sup>。彼については、史料がほとんどなく、生年、清国への留学歴などは詳らかではない<sup>17)</sup>。だが呉永寿と同様に、長崎の唐通事の血筋を引くとみられる点はきわめて興味深いであろう。

三井物産の業務日誌「日記」（明治27年10月1日の記述）では、この呉永寿と島田籙太郎が、ともに先述の石本鑽太郎同様に、日清戦争時には陸軍省から通訳官として従軍を命じられていたことが判明するから、この両名もかなりの中国語能力を備えていたということはいえそうである。

日清戦争後の島田籙太郎の足取りをつかむことは困難であるが、呉永寿の方は、三井物産の清国内支店・出張店を転々とし、その主任クラスを任されていたことは既述の通りである。そして呉永寿は大正5（1916）年2月、北京に三井物産の社員養成機関である三井書院が創設された際、その監督となり、後進の指導にあたったという<sup>18)</sup>。明治期半ばまでに、すでにながりのレベルに達していた呉永寿の中国語能力は、その後、より一層磨きがかけられたということであろう。

### Ⅲ 呉永寿に続く中国語スペシャリスト

#### －御幡雅文と呉大五郎のこと－

#### (1) 長崎唐通事

前節での考察から——特に呉永寿と島田籙太郎のケースから——、明治期半ばの三井物産在清国支店で中国語を巧みに操る者の、その語学能力のルー

16) 長崎にある多数の墓碑から唐通事の家系をたどった宮田安『唐通事家系論攷』（長崎文献社、昭和54年）のp 755では、「籙」の字が合字表記ではないものの、島田彌三次・島田久米太郎について次のように記す。

〔島田彌三次は一筆者注〕 呉泰蔵の弟（和三郎の次の）である。

初め馬五郎といい、東濱町の島田治八の養子となった。その子久米太郎が継いだ。

17) 前掲「史料紹介・三井物産会社上海支店『内状』」p 283の史料〔89〕に拠ると、島田籙太郎は、明治21年12月時点では、上海支店に勤務していたことが確認できる。また「三井物産株式会社店別使用人録」（三井文庫所蔵史料、物産50-18）に拠ると、島田は明治43年8月半ばまでは、三井物産に在籍していたことが確認できる。

18) 前掲『続対支回顧録』下巻・列伝、p 224。

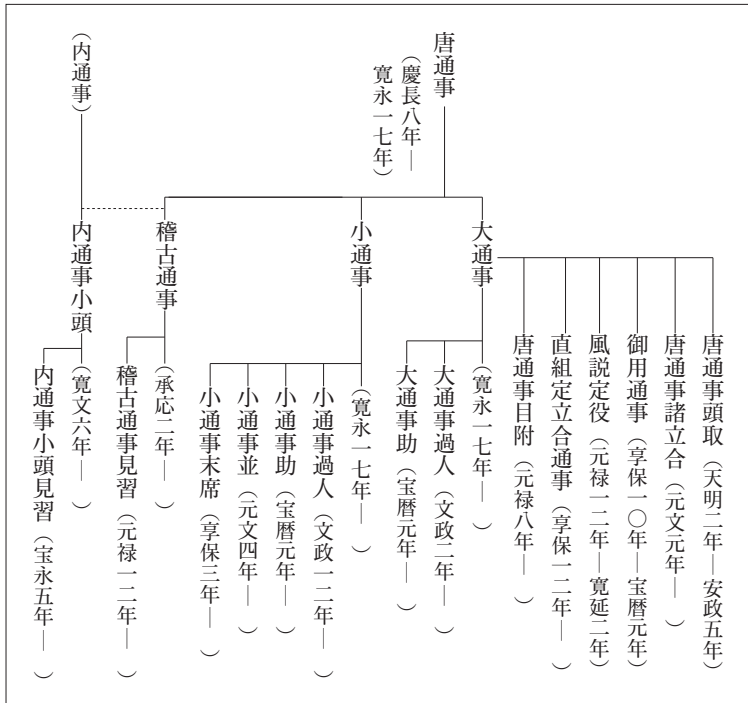
ツのひとつとして、江戸時代の長崎で脈々と受け継がれてきた中国語の専門家集団である「唐通事」なるものが浮上してくるであろう。ここで、その長崎の唐通事について、簡単に確認しておこう。

江戸幕府は長崎を直轄地として長崎奉行を設置したが、その下に唐通事という地役人を置いた。長崎奉行は中央から派遣されて着任し、また別の地に転任していきうる役人であるが、唐通事は地役人であり長崎に定住した。唐通事とは、中国語の通訳・翻訳以外にも、唐船（明船・清船）の来航・貿易の業務、長崎在留中国人の取締り等にも携わり、また長崎奉行の外交・通商上の諮問を受けたりすることもあった。唐通事は慶長8、9（1603、04）年頃、初代長崎奉行小笠原一庵が中国の山西省出身で当時長崎在住の中国人馮<sup>ひょうろく</sup>六を登用したことに始まるという。元和期（1615～1624年）においてもその数は2、3人の規模で推移したが、いわゆる鎖国体制が構築されていくにつれ、寛永17（1640）年には大・小通事に分けられ、これら大・小通事をもって本通事と称した。承応2（1653）年には、さらに稽古通事が増設され、この時点で大・小・稽古通事の三職階制を基軸とする本通事体制が成立した。18世紀半ばの宝暦期、さらに文政・天保期（1818～1843年）にはさらに人数が増やされ、それに伴って機構が拡大され、職制が細かく分化したとされる（図1参照）。

唐通事に任せられたのは明末清初期渡来の中国人を祖とする世襲の家筋であり、それは70数家（つまり70数人）あったとされる。唐通事の家筋に生まれた男子は年少期に稽古通事や稽古通事見習いとなって中国語を学び、習練を積んで小通事、大通事に昇格する。能力があるからといって皆が昇格できるわけではなく、それぞれの役に定員があって昇格はたやすいことではなかった。70数家の唐通事の家筋のうち、11、12名ほどだけが大通事と小通事からなる本通事になることができる。大通事を出す家柄は決して多くはなく、幕末期までは颯川<sup>えがわ</sup>・林<sup>はやし</sup>・彭城<sup>さかき</sup>を姓とする少数の家による寡占が続いたのであった<sup>19)</sup>。

長崎唐通事は、江戸幕府の倒壊にともなって崩壊するが、その語学力や外

図1 唐通事の職制



(出典) 林陸朗『長崎唐通事—大通事林道榮とその周辺』(吉川弘文館、平成12年) p4。

交渉の経験を活かして、彼らは明治期に入っても、対外交渉の即戦力として活躍していくことになる。

このように長崎唐通事のことを確認したうえで、明治期の三井物産の清国での活動を観察してみると、長崎の唐通事につながる中国語スペシャリストをあと2名見出すことができる。それは御幡雅文と呉大五郎という人物である。以下、この両名についてみていくことにしたい。

19) 長崎唐通事の仕組みについては、林陸朗『長崎唐通事』(吉川弘文館、平成12年)第1章、および許海華「幕末における長崎唐通事の体制」(関西大学『東アジア文化交渉研究』第5号、2012年) pp 267-268、等を参照。



(2) 御幡雅文<sup>20)</sup>

御幡雅文は安政6(1859)年、長崎に生まれた。明治4年というから彼が12歳ぐらいの頃に東京に出て、鄭永寧に就いて漢学を学んだ。この鄭永寧とは、先ほどから名前があがっている唐通事・呉泰蔵の実弟であり、呉来安の実兄である。鄭永寧はもともと呉右十郎と名乗っていたが、同じく長崎の唐通事であった鄭幹輔に養子入りしたのち、鄭永寧と改名したのであった<sup>21)</sup>。

鄭永寧は、東京に出てきていた御幡雅文に中国語を学ぶよう勧め、鄭永寧の実弟呉来安を紹介したという。そして御幡は呉来安のもとで中国語の勉強に励むようになった。呉来安のもとでの中国語修業が2年ほどすぎた頃、その御幡の上達をみた呉来安は、御幡に東京外国語学校で学ぶように勧め、これを受けて御幡は明治9年に同校に入学することになった。御幡はそれまでもっばら南京語を勉強していたが、同校在学中には北京語(北京官話)に切り替え、同校を卒業した御幡は、明治12年から清国・北京公使館に留学生として派遣された<sup>22)</sup>。翌13年には、御幡雅文が東京で世話になった鄭永寧の三男、鄭永邦が通弁見習として北京公使館に派遣されてきた。鄭永邦も御幡と同じく、東京外国語学校を卒業したあと、外務省に入っていた。北京公使館での久しぶりの再会に、ふたりは御幡の恩人鄭永寧のことや、東京外国語学校の先生・後輩のことなど昔話に花を咲かせたという。

御幡は北京での留学を終え、明治15年に帰国するが、帰国後は熊本鎮台に赴き、そこで将校たちに中国語を教えることになった。熊本では鎮台以外にも、私的な勉強会を開いたり、また熊本の名門沓々鬘、市立商業学校などさまざまなところで精力的に中国語を講じた。その私的な勉強会に参加してい

20) 御幡雅文については断りのない限り、葛生能久著：黒竜会編『東亜先覚志士記伝』下(黒竜会出版部、昭和11年) pp 134-135、および六角恒廣『漢語師家伝』(東方書店、1999年) pp 127-176 に拠る。

21) 長崎市小学校職員会編『明治維新以後の長崎』(同会、大正14年) p 263。

22) 前掲『東亜先覚志士記伝』下、p 134 では御幡雅文は「外務省留学生」であったとされているが、前掲『漢語師家伝』p 141 では、陸軍参謀本部の依頼による留学生派遣とのことである。陸軍参謀本部が派遣したが、滞在先が北京公使館であったことから、『東亜先覚志士記伝』は、「外務省留学生」と認識したのかもしれない。

た将校として、のち明治23年、上海に日清貿易研究所を開くことになる荒尾義行（荒尾精）がいる。日清貿易研究所とは、清国との貿易に従事しうる人材の育成を目的とするものであり、外国語としては中国語と英語の授業があった。また商業地理・清国商業史・簿記・経済・法律なども講じられた。

御幡雅文は荒尾義行に請われて、この日清貿易研究所設立に関与し、また上海にわたって、この研究所で中国語の授業を行った。明治27年には日清戦争が勃発し、前節で述べた「支那通」たちと同様、御幡雅文も陸軍の通訳官に任命され、戦地に赴いたのであった。

日清戦争後には、台湾が日本に割譲されることになるが、御幡は軍の命令で台湾総督府に赴任し、台北で台湾人への布告文・法律などの中国語への翻訳などに従事した。明治31年、台北滞在中の御幡に、三井物産の山本条太郎<sup>23)</sup>から書簡が届いた。山本条太郎は御幡に対して、三井物産社内で整備されつつあった清国ビジネスを担いうる人材の養成機関での中国語教育の担当を依頼したのであった。御幡雅文は、かつて上海滞在中に、当時、三井物産上海支店で勤務していた山本条太郎と交流しており、山本が御幡の中国語能力のきわだった高さを認め、その後の活躍をみて、この依頼につながったものとみられる。依頼を受けて御幡は三井物産入りを決意し、再び上海に赴任することになった。

「はじめに」で少しふれたように、三井物産では清国での営業活動に必要なとされる人材を育成するため、明治30年代に社内での人材養成制度を構築した。すなわち「清国商業実習生」、「支那修業生」、「海外貿易実習生」の制度がそれである。これらの制度は、三井物産を含めて、清国で営業活動を行う欧米や日本の商社が概して買弁に依存しており、その依存状態から脱せんとして、同社が独自に構築を試みたものであった。

清国で欧米諸国や日本の商人（商社）が通商活動を行う場合、言語や風俗、商慣習などに通じないことから、その土地の事情に通じた現地人（つまり清

23) 前掲『漢語師家伝』p 163以降では、「山本条太郎」と表記されているが、明らかに「山本条太郎」の誤りであるから、本稿本文中では修正して記した。

国人)を雇い入れざるをえないことが多かったのであるが、その雇い入れられた現地人は買弁(あるいはコンプラドル)と呼ばれた。買弁は通常、外国商人(欧米商や日本商)に雇われて、その外国商人と清国商人の間に介在し、両者間の商業取引を取りなす存在であった。買弁は、通常複数の部下を集金人や勘定方として自らの責任で雇用して集団を組織し、外国商から支払われた給与を、自らの部下にも配分していた。買弁は外国商人から給与を受け取るとともに、取引が成立するたびに、その外国商人および清国商人の双方から口銭を得るのが一般的であった。三井物産では、社長益田孝による明治29年と31年の清国視察をきっかけに、この買弁への口銭支払いを無駄なものとして、脱〈買弁依存〉に舵を切ったのであった。そこでは買弁無しでも商売ができるような人材の確保が必要とされるが、そのために必要な人材を確保すべく、明治31(1898)年以降、順次、独自の人材養成システムを始動させた<sup>24)</sup>。

すなわち、明治31年に尋常中学3年修了程度(15歳)の者を対象に「清国商業実習生」制度を立て、同年および翌年に2名ずつ計4名の実習生を清国に派遣し、明治32年には中学全科卒業程度(17歳)の者を対象に「支那修業生」制度を立て、同年に11名を修業生とし、翌年以降も毎年10名、6名、4名と順次清国へ派遣していった。

このような中国ビジネスを担いうる人材の社内養成機関の拡充を受けて、三井物産は買弁依存から脱却していったとされるが、御幡雅文は、この養成機関の教師ならびに監督役に就任するよう依頼を受けたのであった。同制度は日本国内の高商などの教育機関が安定的に清国ビジネス向けの人材を輩出できるようになるまでの間、森恪、児玉一造というような後の著名人を生み出すなど、三井物産における人材育成制度として重要な役割を果たした。明治34年以後、上海支店長を務めた山本条太郎は、翌35年の三井物産支店長会議で、「(上海支店には)御幡ノ如キ良教師アリ」<sup>25)</sup>と発言しており、相変わ

24) 前掲、山藤竜太郎論文、pp 9-10。

25) 『三井物産支店長会議議事録』1：明治35年(三井文庫監修、丸善、平成16年) p 318。

らず御幡に対してきわめて高い評価を与えていたのであった。

### (3) 呉大五郎<sup>26)</sup>

呉大五郎は文久2（1861）年8月、長崎に生まれた。父は島田茂という人物であり、幼少にして呉碩の養子となり、呉姓を名乗るようになる。呉碩は、前節でしばしば出てきた長崎の唐通事のなかでも、幕末期に台頭したという呉泰蔵の実弟である。呉大五郎は、明治9年に義兄呉啓太郎に伴われて清国に渡り、養父呉碩のもとで中国語を学びはじめた。呉碩は日本の外務省の役人であり、当時、上海領事館に勤務していたのであった<sup>27)</sup>。

呉大五郎は明治11年には帰国し、東京外国語学校に入学して中国語の勉強を深めた。外国語学校での学業成績が優秀であったため、彼は選ばれて北京に留学した。後には外務省留学生となり、陸軍の通訳に任じられ、清国内旅行の機会を得るなどして中国語および清国事情に精通していくことになる。

明治19年には清国から帰国して外務省入りし、その後は、ロンドン領事館書記生、インド・ボンベイ領事に任じられるなど、中国語のみならず英語の能力も伸ばしていった。

明治28年に帰国した際、三井物産益田孝の知遇を得ることとなり、呉大五郎は益田の推挙により三井物産会社に入ることとなった。三井物産入社後は、年が明けた明治29年、早速にして香港支店長に、また31年には神戸支店長に任ぜられたというから、かなりの厚遇であったとっていいだろう。日露戦争時には、在清国各支店に出張し、店員を督励し業務の不都合が生じないように努めたという。

呉大五郎は呉永寿や御幡雅文のように、三井物産の社員養成機関での教師歴は確認できないものの、御幡雅文のところでも名前があがった鄭永邦と共

26) 呉大五郎については断りのない限り、『京浜実業家名鑑』（京浜実業通信社、明治40年）補遺の部 p26、古林亀治郎編『実業家人名辞典』（東京実業通信社、明治44年）クの4頁「呉大五郎」の項に拠る。

27) 前掲『対支回顧録』下巻列伝、p95。ただし前掲『実業家人名辞典』の方では、この時、呉碩は廈門領事館勤務であったとされている。

編で、明治21年に『日漢英語言合璧』なる辞書的な語学書を、また明治43年にはさらにロシア語を追加する形で、同じく鄭永邦と共編で『日清英露四語合璧』なる語学書を上梓している<sup>28)</sup>。呉大五郎は中国語のみならず、英語、ロシア語まで習得していたということになるのだろう。

#### IV 三井物産中国語スペシャリストの源流としての「呉家六駿」

ここまでの考察で、明治期三井物産で勤務した中国語のスペシャリストともいうべき呉永寿、御幡雅文、呉大五郎の3名は、いずれも江戸時代の長崎で脈々と受け継がれてきた中国語の専門家集団である唐通事のなかでも、特に呉泰蔵を長男とする呉兄弟と関係を有する者たちであったことを確認した。その呉泰蔵は、呉用蔵の長子である。呉用蔵には6人の男児がいて、呉泰蔵から六男の呉来安までの6名はみな秀才の誉れ高く、「呉家六駿」と呼ばれた。

前節で、江戸時代の長崎唐通事についてふれた際、そのなかでも大通事を出す家柄として幕末期まではえがわ はやし きかき 颯川・林・彭城を姓とする少数の家による寡占が長らく続いたことを述べたが、幕末の万延（1860年、61年）以降、新たな名門が大通事クラスに進出したことによって、従来の寡占体制は終焉を遂げつつあった。その新たに進出したという名門4家のひとつに呉泰蔵、すなわち「呉家六駿」の長男がいた<sup>29)</sup>。これ以後、呉家六駿の躍進がはじまるが、呉家六駿と、これまでに出てきた三井物産の中国語スペシャリストの関係を整理してみよう。

呉家六駿の次男和三郎は高尾家に養子入りした。三男彌三次は島田家に養子入りして島田彌三次となり、その子島田衆太郎も明治21年以降に三井物産上海支店に「支那通」として勤務したのであろうということは、すでに述べたとおりである。四男はもともと呉碩三郎と名乗ったが兄の呉泰蔵の死後、

28) 鄭永邦・呉大五郎共編による『日漢英語言合璧』（鄭永慶による刊、明治21年）、『日清英露四語合璧』（島田太四郎による刊、明治43年）は、いずれも国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで閲覧可能である。

29) 前掲、許海華論文、p 273。

この呉碩三郎が繰り上がって大通事となった。呉碩三郎は呉碩と改名するが、島田大五郎がこの呉碩に養子入りして呉大五郎と名乗った。五男は呉右十郎であったが、彼は唐通事であった鄭幹輔に養子入りしたのち、鄭永寧と改名した。この鄭永寧に弟子入りして師弟関係にあったのが御幡雅文である。そして六男は呉来安であり、彼の子が明治中期以降の三井物産の在清国店舗で活躍した呉永寿であった。

これらのうち最初に三井物産に入ったのは呉永寿であるが、その三井物産上海支店入りについては、呉永寿の「父来安に師事せる上田安三郎が、当時同社（三井物産のこと―筆者注）の上海支店長であつた関係からであると云はれて居る。」<sup>30)</sup>との記録がある。上田安三郎は柳川藩士池田源左衛門の三男として、安政2（1855）年に長崎の柳川藩邸で生まれた人物である。幼少期に長崎の商人上田栄助に養子入りし、8歳の時から長崎の広運館で英学を学ぶかたわら漢籍と書法を呉来安に習った。上田はその後、長崎在留アメリカ人ロバート・W・アルウィンに雇われ、アルウィンから厚い信頼を得て、アルウィンの助力で19歳からアメリカに留学した後、三井物産入りするわけであるが、差出し年は不明ながら上田が師事したという呉来安から上海在勤の上田あての次のような書簡がある。

然ハ豚児永寿事今般貴局へ参上之処、特別之御恩特相蒙、本月一日内方書記等御下命ニ相成リ同名ヨリ詳報ヲ接シ何トモ感激之次第筆難尽感誦不傾奉存候、貴君ハ曾而御年少之折リ素読等致し候由之処、其後打絶兩途異方ニシテ今日有之義承及候…<sup>31)</sup>

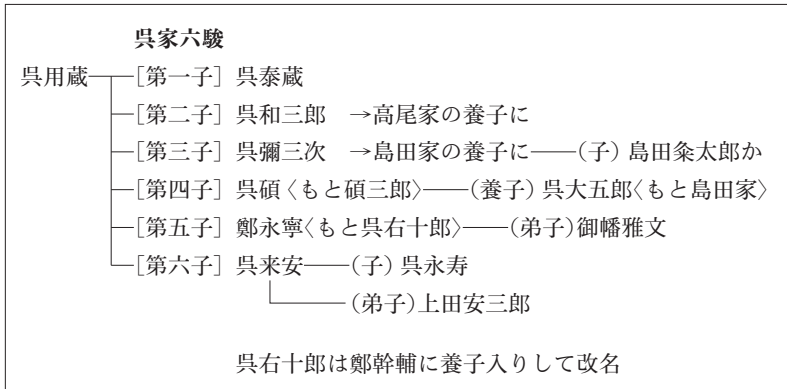
ここでは、上田の便宜によって呉永寿に「書記方御下命」となったことに、父の来安が謝意を表している。上海領事館、あるいは三井物産上海支店いずれかの「書記方」であろうと推測されるが、少なくとも上海にいた呉永寿に上田安三郎が何らかの便宜をはかったことは確かであり、この書簡ではさら

30) 東亜同文会編『統対支回顧録』下巻列伝（原書房から昭和48年に復刻版。原本は昭和16年刊）p 224。

31) 田中康雄「史料紹介・三井物産会社上海支店『内状』」（『三井文庫論叢』第7号、昭和48年）p 247。

に、上田が幼少期に呉来安のもとで、「素読」の手ほどきを受けたこともしたためられているのであるから、上田の幼少期からかなりの歳月が過ぎていたとはいえ、上田と呉来安・永寿父子との関係はかなり密に維持されていたとみてよいであろう——以上のような呉家六駿をとりまく複雑な人間関係を図2として掲げておく。

図2 呉家六駿の関係者



(資料) 東亜同文会編『対支回顧録』下巻列伝(原書房から昭和43年に再刊) pp 32-33、宮田安『唐通事家系論攷』(長崎文献社、昭和54年) pp 751-756、長崎市小学校職員会『明治維新以後の長崎』(同会、大正14年) pp 260-261、pp 263-264 などにもとづいて作成。

上田安三郎が呉家六駿のうちの末子呉来安とコネクションを有していたとしても、上田の場合は、幼少期に呉来安から漢籍や書法を習っただけで、たしかな中国語スキルを身につけたうえで上海に赴任したとはいえない。だが上田は広運館での英学修業やアルウィンとの交わり、さらにアメリカ留学で相当な英語力を身につけていた。英語のスキルでもって上海支店を切り盛りできるのであろうかという疑問も生じようが、上海赴任当初の上田には、上海ですでに商会を運営していたスイス人のブリネがいて上田をサポートしたし、また上海領事の品川忠道も、ある程度上田を支えていたとみられる<sup>32)</sup>。上海支店は開設当初、官営三池炭鉱の石炭の売り込みが主要な業務で



あり、その主な売り込み先は上海で営業していた欧米系の汽船会社などが中心であったから、商談にはまずは英語が必要とされたと思われる。よって上田のような英語スキルをもつ人材を上海支店に充てたことは合理性を有していた。しかし上海支店は石炭商売以外にも綿花の買い付けなど清国人を相手とする商売にも従事していくから、中国語のスキルも早晚要求されたはずである。これに関連して、やや後年の明治期半ばの上海での商取引の事情について、益田孝が次のように語っている。

上海に居る頃、山本君（山本条太郎のこと一筆者注）だつたらうと思ふが、ビジョンイングリツシュと云ふものをチャイニーズが喋ると云ふから、鳩が餌を食ふ時の様な喋り方をするのだらうと想像した。何でもあの時分朝十一時になると方々の支那人が集つて来る。さうして色々商売上の話をしたり雑談をしたりする。それから支那人等は阿片吸引窟に入つて、二時間か三時間位は寝て居るですね。支那人は店にハイポー（小僧）を抱へて居つてお得意を歩かせて、今日は何と云ふ船が着いたとか、又は商売上必要な事柄を聞いて来させる<sup>33)</sup>。

上で「ビジョンイングリツシュ」と表記されているのは、今日では一般にピジン・イングリッシュ (pidgin English) とされているもので、植民地などで先住民との交易で使われた混成語のなかでも、特に英語を軸にした混成語をピジン・イングリッシュと呼ぶようだが、上田が上海に赴任したころでも、清国人との日常的な交渉では、そのピジン・イングリッシュ（益田のいう「ビジョンイングリツシュ」）でもってコミュニケーションがとられたのではないかと想像される。その意味でも、英語力を有する上田が上海に派遣されたことには意味があったのだろう。

三井物産のニューヨーク支店やパリ支店がいったん閉鎖されていくのと対照的に、三井物産上海支店の初代支配人となった上田安三郎が上海支店を長

32) 由井常彦「明治期三井物産の経営者(上)」(『三井文庫論叢』第41号、平成19年) p 267。  
ちなみに品川忠道も長崎出身のオランダ通詞であった。松本郁美「初代上海領事品川忠道に関する一考察」(京都女子大『史窓』第58号、平成13年) 参照。

33) 「山本条太郎翁追憶録座談会筆記」前掲、原安三郎編『山本条太郎翁追憶録』p 688。



期にわたって維持し、また商権を拡大した功績はきわめて大きいと思われるが、その支店運営の過程で、上田がコネクションを有した長崎唐通事系の人材、呉永寿を雇入れて在清国店舗を巡らせたことの意義もきわめて大きかったように思われる。

## V 結語

本稿でとりあげた中国語スペシャリスト呉永寿、御幡雅文、呉大五郎らは3人とも興亜会支那語学校や東京外国語学校という学校で学んだ経験を持つが、上で述べ来たったような彼らのキャリアをみれば、彼らの中国語スキルの形成においては、それらの学校で学んだことよりも、長崎唐通事の一家である呉泰蔵を長男とする呉家六駿との関わりの中で、師匠から直接に稽古を受けて築かれていった部分のほうが重要であったような印象を受ける。

もっとも明治中後期の三井物産在清国店舗には、上記の者以外にも、中国語をある程度話せる人材もいた。例えば明治35年の支店長会議で上海支店長の山本条太郎は以下のように発言している<sup>34)</sup>。

店員中ニハ幡生、丹羽、長野、大村、江原ノ如キハ先殆支那語ニテ商談  
ヲ為シ西洋人ノ驚キ居ル位ナリ

だが山本条太郎は次のように続けてもいる。

乍併幡生ハ糸ト織物ニ限り鉄物ノ話ハ出来ズ、長野ハ綿花ノ外ニハ一語  
モ吐ケズ、江原ハ石炭ノ外ハ通用セズ…

彼らは中国語はある程度は話せるものの、それは各自の担当商品に限定されたものだったようである。上で名があがった「幡生」というのは幡生弾治郎のことであるが、三井物産の業務日誌「日記」によると、幡生は下関商業学校の卒業生で、明治21年に三井物産に入り、その後は3年程国内で勤務し、明治24年に上海支店に転勤となった人物であったことが判明する<sup>35)</sup>が、彼は

34) 前掲『三井物産支店長会議議事録』1、pp 318-319。

35) 前掲「日記」明治21年9月24日、同年11月17日、「日記」明治24年7月7日（三井文庫所蔵史料、物産15）の記述を参照。ただし「日記」において幡生弾治郎は源治郎とか弾二郎とか表記が一定しない。

長崎唐通事系の師匠から中国語を学んだ形跡もなく、また東京高商卒業生でもなく、上述の三井物産の社内養成制度で修業生として訓練を受けたわけでもない。この幡生弾次郎などは OJT で中国語に熟達していった典型例だと思われるが、それでも、山本条太郎にいわせれば、その会話の内容は限定されたものだった。本稿でみてきたように、呉永寿や御幡雅文、呉大五郎のような人材は中国語教師をつとめたり語学書を刊行するほどのスキルを身につけていたのであり、それは幡生弾治郎らとは別格であったということになるだろう。

(筆者は関西学院大学商学部教授)

[追記]

本稿作成に際しては公益財団法人三井文庫所蔵史料を数点使用・引用させていただいた。史料の閲覧を許可くださり、また種々のご教示を賜った同文庫に末筆ながら感謝申し上げます。